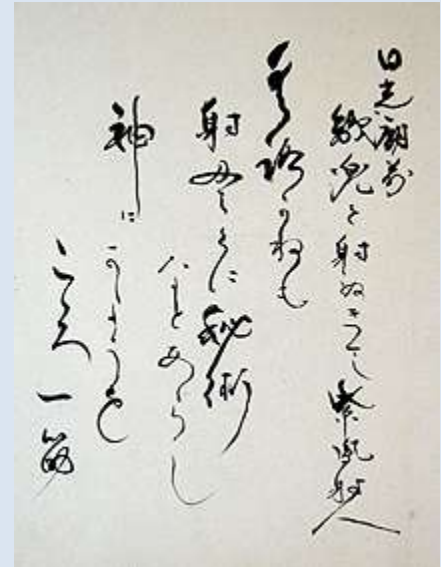


4 兜射貫き



兜射貫き後の心境を

詠われた 和 歌



大学卒業後何年かして、この写真と和紙に書かれた和歌が、筒に入れられて、吉田先生から私に送られて参りました。これらの写真と和歌は、吉田先生に関するいろいろな書物に使われておりますが、特に私のためと言う証左は、写真の左下に先生の署名があること、和歌の前に「日光廟前 鉄兜を射ぬきて 紫鳳射人」と書かれていることであります。他の同じ写真には先生の署名がありませんし、書の方も、他のものは和歌の後に「紫鳳射人」と書かれております。写真は半切大の大きさ、和歌は色紙ではなく、それより大きめの和紙に書かれています。

昭和十六年、日光東照宮において、鉄兜を射貫かれたお話は、吉田先生から学生時代に何度か伺いました。初矢から第四矢まで、兜に跳ね返されたこと。残る最後の矢は、五本の中で作りが一番劣るものであったこと。鉄兜の中に飯粒をぎっしり詰めておけば空洞がなくなり、最初に射貫けたかもしれなかったこと。途中でそのことに気づき、持ってきてもらおうと考えたが、弁解がましくできなかつたこと。最後の矢で射貫けなかつたら切腹をして詫びようと思ったこと等々、目に涙を浮かべ語られ、感激のあまりもらい泣きしたものであります。この件を書いている間にも、目が潤んで参りました。古武士の風格を漂わせた吉田先生ならではの、なし得なかつた偉業であることは確かなことでもあります。